

## アルプ展によせて

### 佐谷和彦

今回の展覧会はジャン・アルプ Jean ARP(ドイツ名ハンス・Hans, 1886~1966)の彫刻・レリーフ10点を中心にドローイング、版画等を加え展示するものである。佐谷画廊で5月8日から27日まで展示の後、尼崎市の西武百貨店「つかしん」で6月9日から21日まで展示される。

この展覧会のためにカタログを作成したが、そのテキストは森口陽さんにお願いし、「アルプ——終りなき変容」と題するエッセーをご寄稿いただいた。アルプの芸術のなりたちを分りやすく解説してあるのがうれしい。また、アルプの年譜、日本におけるアルプ展の記録および日本語文献を中島理寿さんに依頼し、ご寄稿いただいた。キッチンとした年譜はその作家の芸術を理解するうえで不可欠なものである、と私は思っている。この年譜を読むとアルプの足跡が明らかにされ、作品の背景がみえてくるのである。お二人に深謝申し上げる。

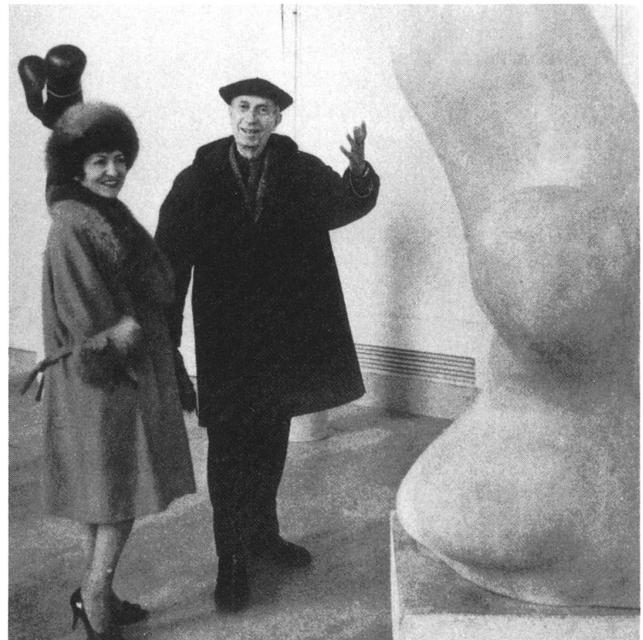
ところで、私がアルプを意識したのは、何時頃であろうか? と記憶を辿ってみると、遙かな昔瀧口修造先生の「16の横顔・ボナールからアルプまで」(白楊社1955年6月刊)を1955年頃に札幌の丸善で買って読んだのが最初だ、と思う。しかしもっと具体的には、私がマックス・エルンスト(1891~1976)に興味を持ち、エルンストを調べていく過程でアルプの存在を知ったと言うべきであろう。エルンストの作家としての出発点は「ケルンのダダ」(1919)である。エルンストより5才年上のアルプはすでに一足先にチューリッヒでダダの洗礼を受けており、エルンストはこのアルプに触発されて、歴史的な「ケルンのダダ」の首謀者となったのである。私はここのところでアルプという作家を意識したのである。

アルプとエルンストの2人が向い合って何かを熱心にのぞきこんでいる面白い写真(1921)があるが、この二人は終生変わらざるよき友人であった。しかしアルプとエルンストはその資質も、作風も、生き方も全く対極的と言ってよいほど違う。すなわち、静と動、有機質と無機質、軟質と硬質、地味と絢爛、一貫性と多様性等々比較してみると面白い。しかし、二人はお互いにそのすぐれた価値を交換し、そこに不变の友



ジャン・アルプとマックス・エルンスト 1921年

ジャン・アルプとドニーズ・ルネ 1962年



情が生れたのだ、と私は思う。

アルプの彫刻をじいとみていると、あたたかさを感じる。冷い金属や石にあたたかい血がかよっているように感じる。それはどうも、アルプの彫刻のフォルムすなわち「まるみ」を呼びたフォルムからきているようだ。アルプの作品のフォルムはいろいろと変容しても「まるみ」は一貫して変わらないのである。あたたかい「まるみ」である。

この展覧会はパリのドニーズ・ルネ画廊の好意と協力により実現したものである。ドニーズ・ルネ画廊と一緒に仕事をするのはこれが2回目で、第一回目はジョセフ・アルバース展(オマージュ・スクエア、油彩)であった。ここにアルプとマダムお二人の写真を掲載し、遙かにマダムのご健勝を祈るものである。ありがとうございました。

(1989年4月3日)